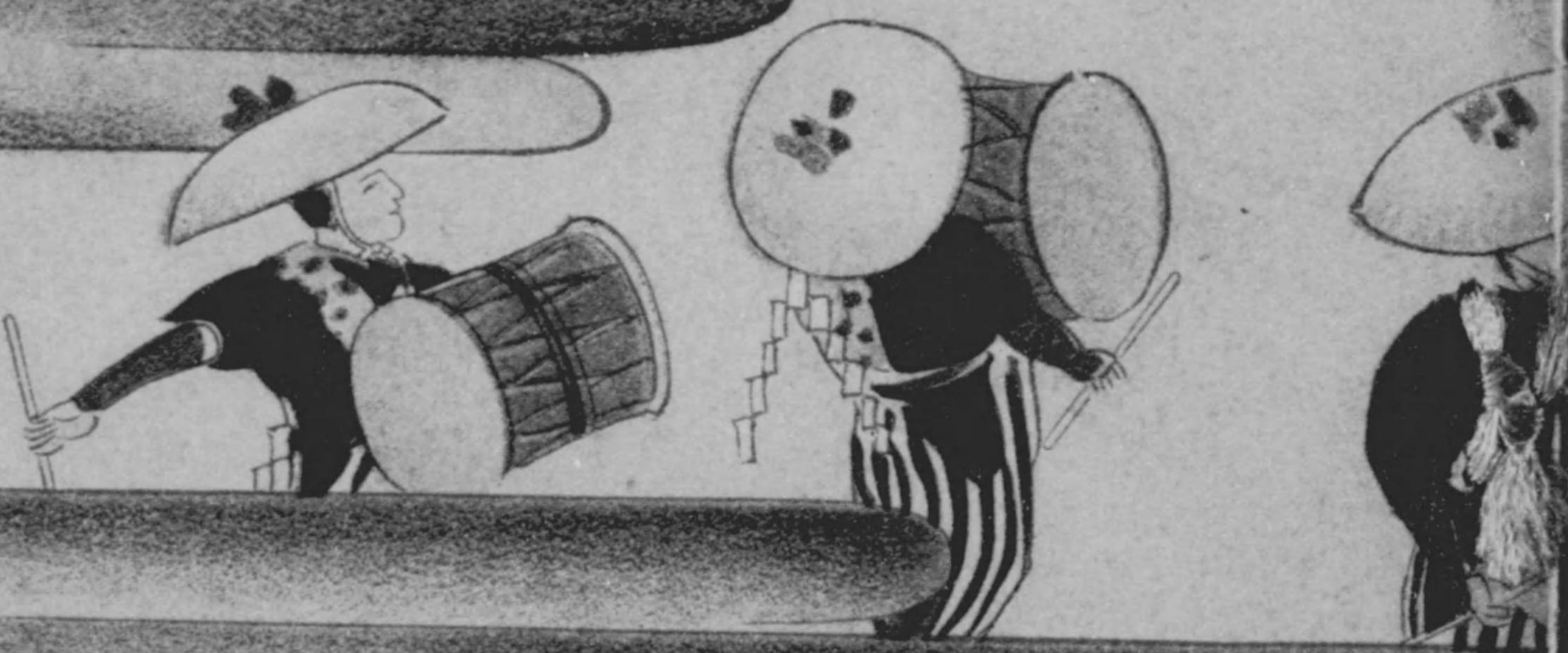


郷土舞踊と民謡

特 260
196



* 0054154000 *

0054154-000

特 260-196

郷土舞踊と民謡

日本青年館

昭和 8

AIC

特260
196

キリンビール

民謡は郷土の華

麒麟は麥酒の粹



麒麟麥酒株式會社

寝る

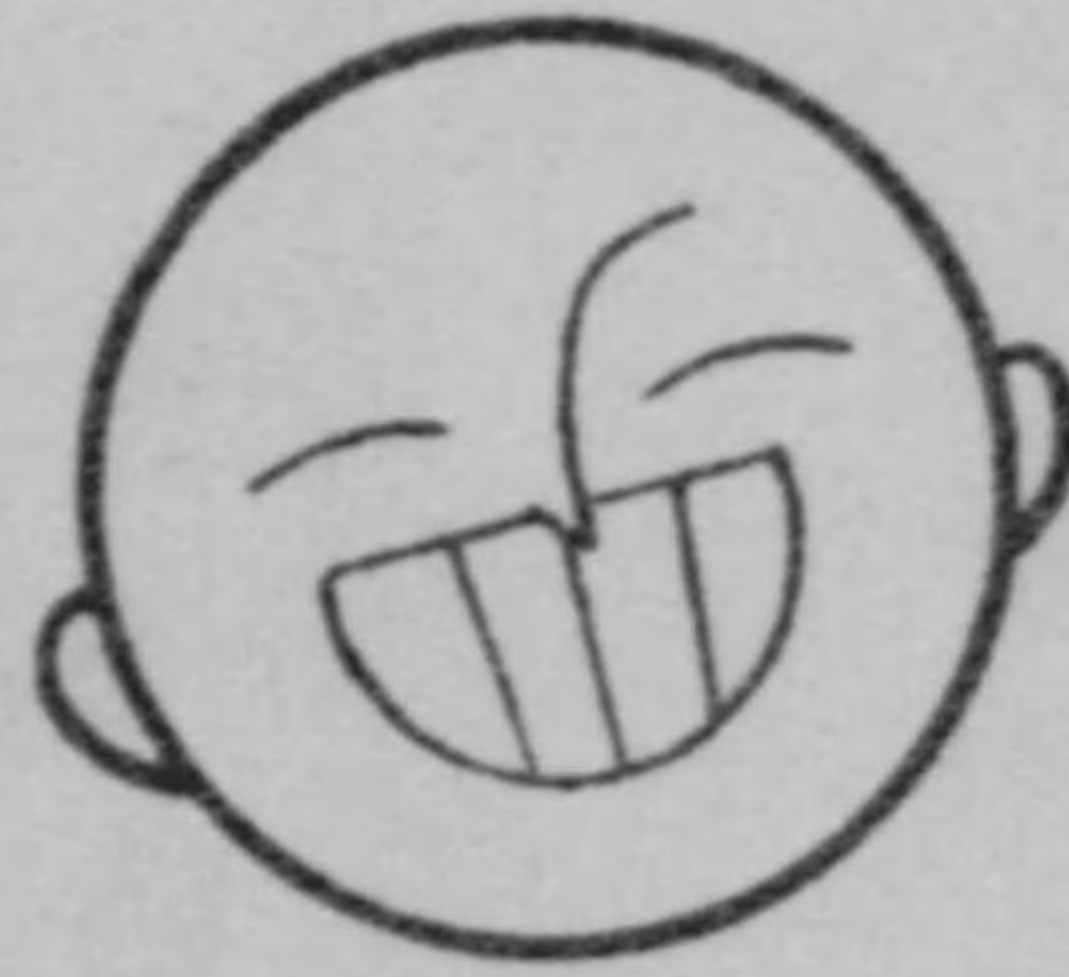


前にも

この
を使ふと



いつも
です



イライラニ歯磨本舗 小森林商店

第七回 郷土舞踊と民謡 序目

第一部

野大坪萬歳

福井縣

田植をどり

宮城縣

こをどり

御蔭踊

大阪府

知多萬歳

愛知縣

休憩



第二部

人形淨瑠璃

德島

乞踊

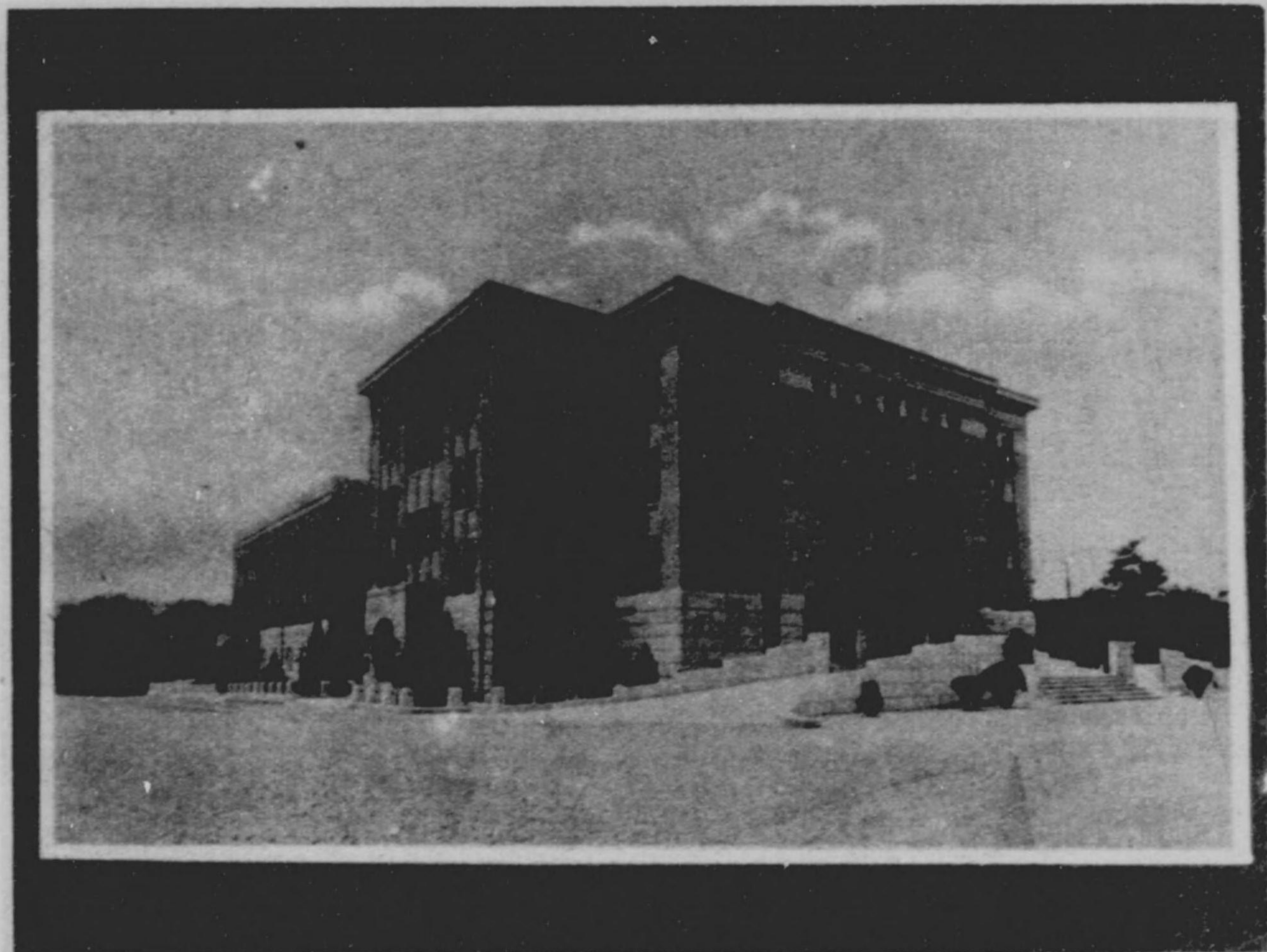
滋賀縣

草地村盆踊

馬子唄 白磨節

大分縣





館年青本日

良い品の

お廉い理由

- 一、現金仕入れを本位とし、一枚の手形をも発行せざることを。
- 一、主として生産者より大量に直接仕入れを行ふこと。
- 一、社債、借入金のように負債を有せざることを。
- 一、極力冗費を節約して利益率を低くすること。

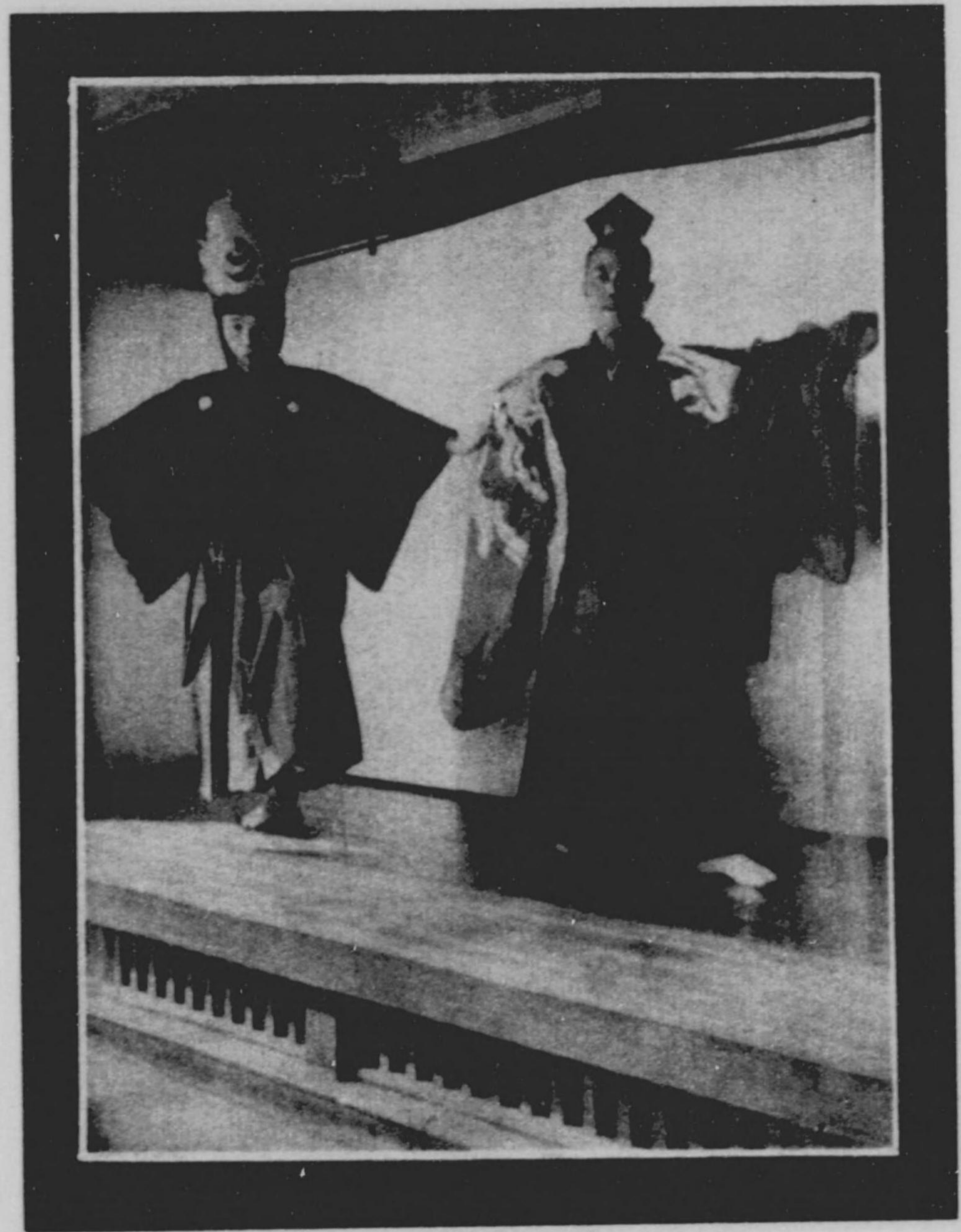
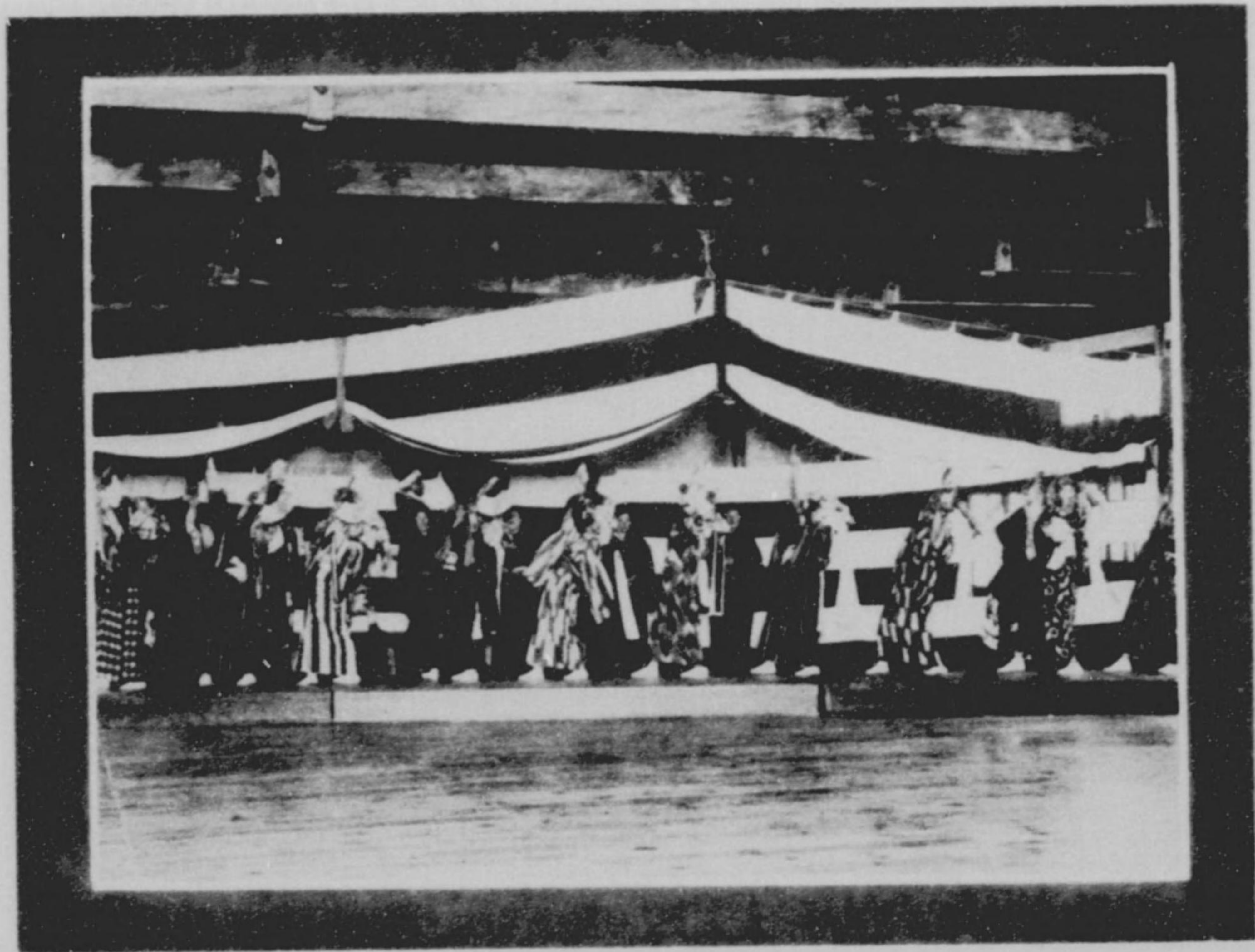


價廉品良 貨百用實

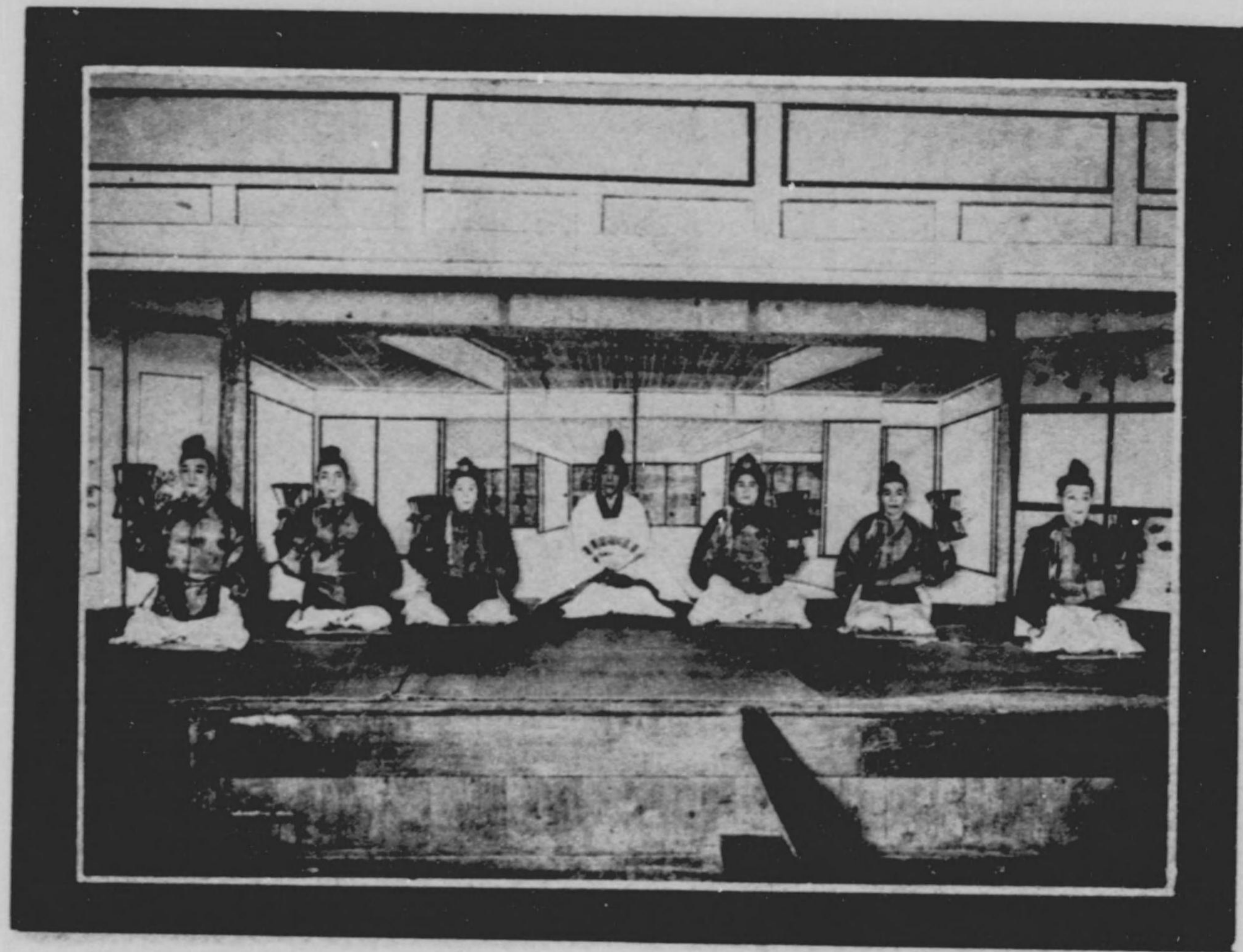
屋坂松

松坂屋の營業所
 東京上野廣小路
 東京銀座六丁目
 名古屋南大津町
 大阪日本橋筋三

田植踊

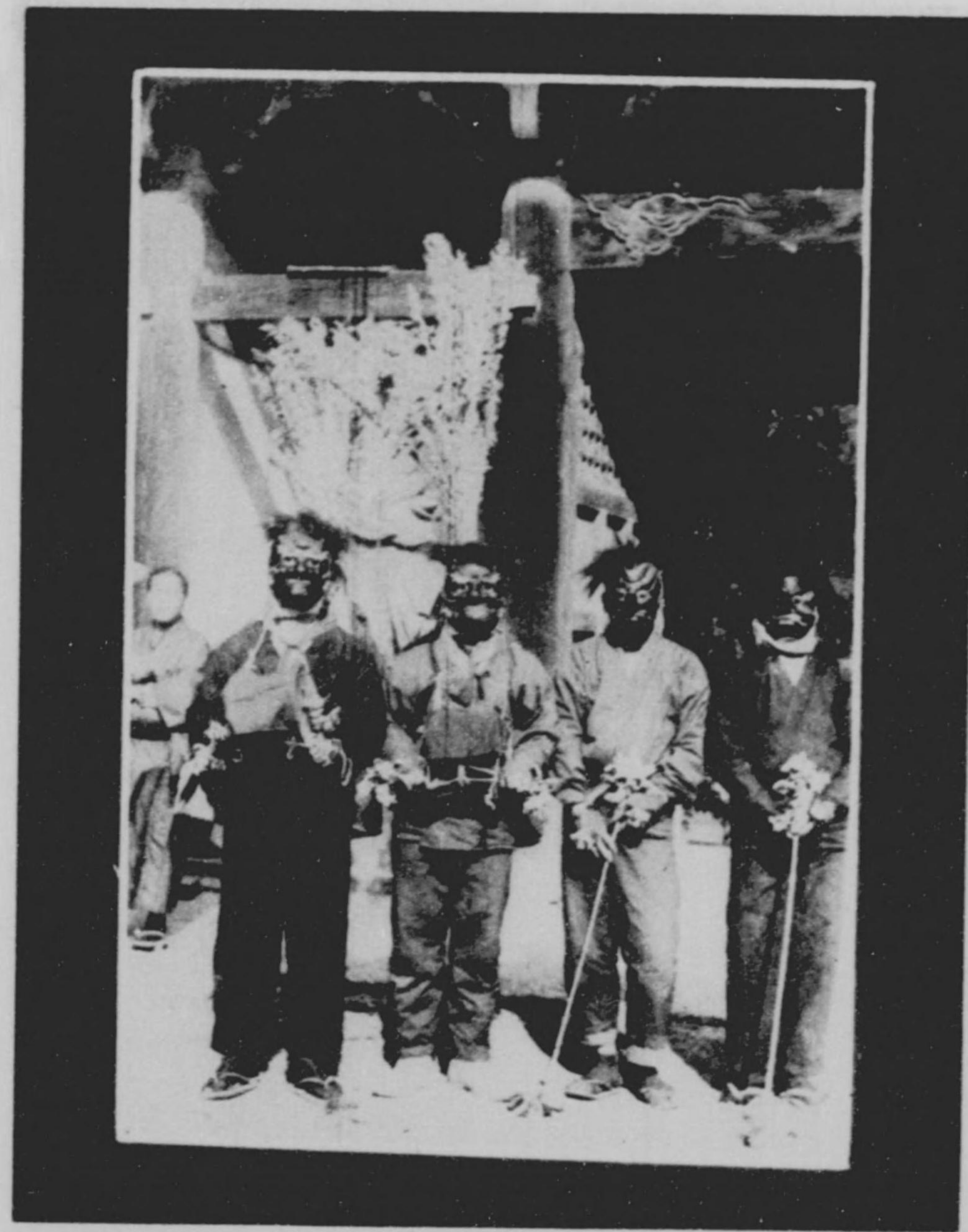


野大坪萬歲



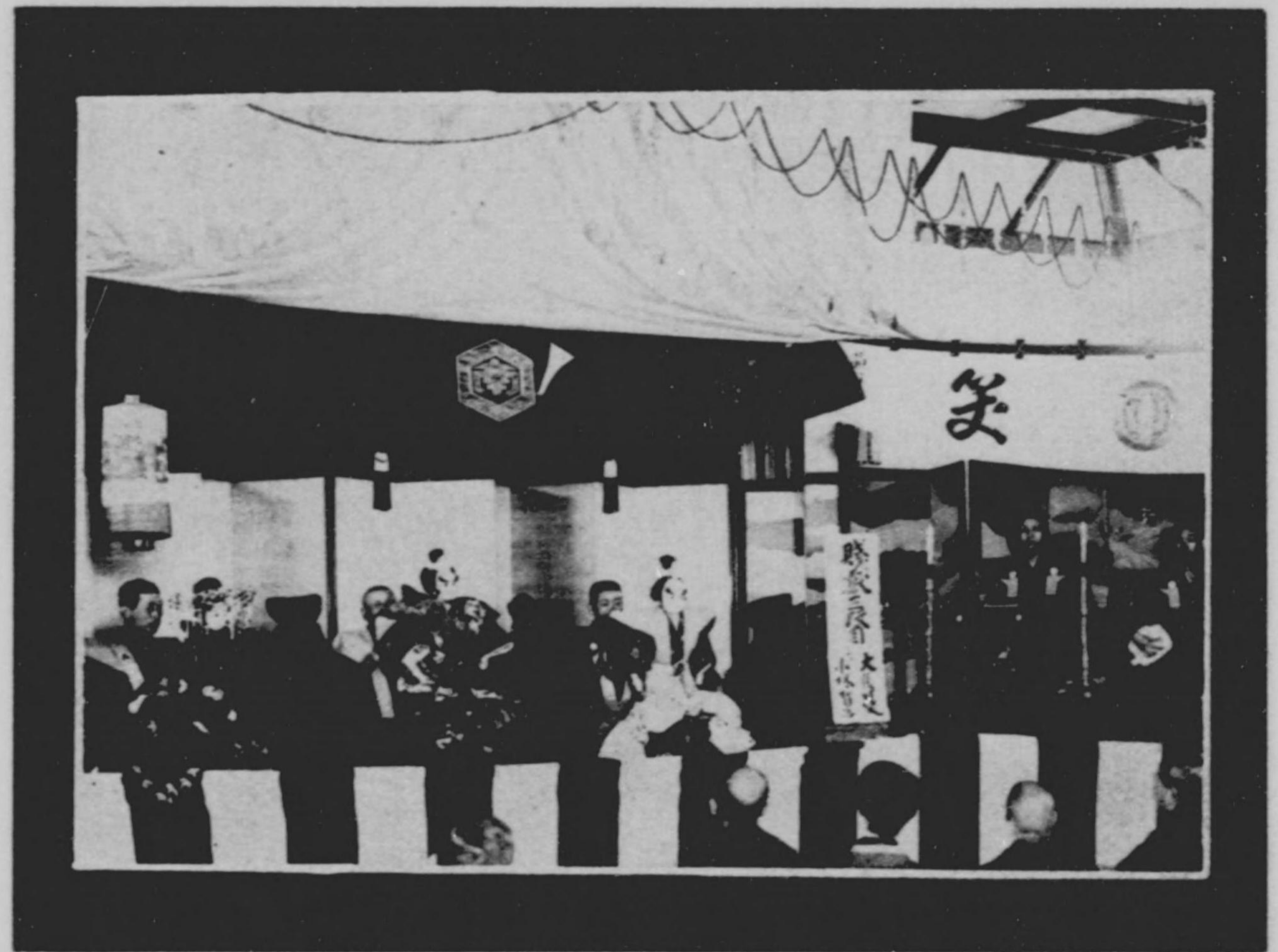
知多萬歳

こをどり

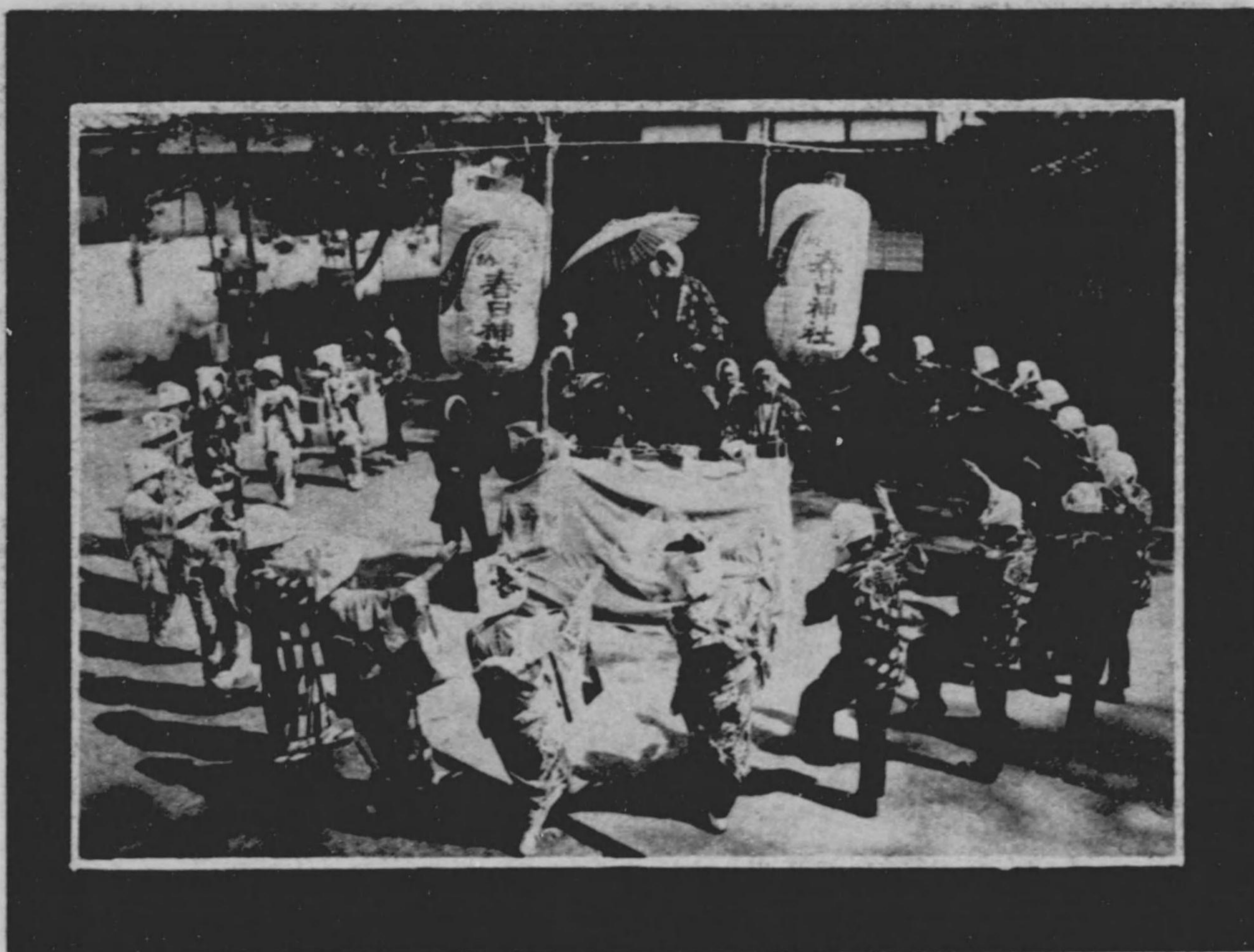




踊乞雨



璃瑠淨形人



草地村盆踊

野大坪萬歳

福井縣今立郡味真野村

一 名義と沿革

味真野村は今立郡の東南に位して、美濃との國境に近く、野大坪の部落を除いては凡て山地で、人王二十六代繼體天皇が皇子の頃、暫らく世を避けられた古蹟であります。一日、御愛馬が俄に氣色すぐれぬ折、馬飼の一人が宇津保の舞を舞ふと、馬は見る間に氣力を恢復したので、皇子は厚く其者を賞せられました。此の宇津保の舞は即ち今日の野大坪萬歳の古い姿で、後、頼朝に召されて鎌倉に出て舞ひ、唱門師の位を授けられたとも申します。一村盡く萬歳を業とし、舊藩時代は福井藩、加賀藩に出入しまして、廢藩後、次第に衰へ、明治四十年前は凡そ百二十名ほどになりましたが、目下は更に減少したとの事で、冬期農閑期の副業として現存のものです。

二 歌舞の實際

衣裳は徳川時代は、太夫は侍烏帽子、紋服に直垂やうのもの、常の袴に刀と扇。才藏は大黒頭巾、紋服、裁着、珍らしくも小太鼓を打ちましたが、明治以來とき／＼變り、近年は大和萬歳式にもなつてをります。尤も曲目に依り、冠物、持物も變ります。曲目は終りに挙げますが、太夫一人に才藏數名が相手になる事も、才藏のみの事もあります。

三 歌詞 (刺鳥刺し萬歳)

才見さいな／＼鳥刺いて見さいな、太夫一つひよ鳥日野の山の、西の谷の東の谷のなか谷小谷を、

竿振擔げてだっくりびっくりあがる、あがる脇のひえの山の檜の枝に、歪んだ屈んだ、
 ヒン曲つた小枝に小雀一羽、とまり居りて囀る聞けば、信濃の國の善光寺の如來の、
 如來の見付に油屋がござる、油屋のお内儀、お尻が尻が大きなものゝ粗忽なもので、
 取つて見たれば七抱も、八抱も、九抱も、十抱も、福の尻か寶の尻か、石か金か力餅かだいもつか、
 とツさまの御重寶、立つにもねまるにもえんやえんや。オさてもえんやえんや、太あえんや、
 えさらのさつとこんで居る所を、おのれ憎い奴、刺いて呉りよと思ふて、
 して呉りよと思ふて、刺いて呉りよと思ふて、ひかもんで構へた、オさよいさ構いた、
 そりやそこ構いたり、よいや、あは、すさやれ、すさやれ、すさやれ、
 ちよん刺いておツ取つた、二つ鼻、ふかがみ山の空なる、小松の小枝に鼻どり奴が止り居りて
 囀る聞けば、明日は日が良い糊つけ干せ、括りつけたんぼん、と、囀る所をちよん刺いて打ツ取つた、
 三つ木鬼美濃の國の、みかさの山のみかさ峠の寢籠の中や、茅原の中がもぞくさ云ふわいの、
 かさ、と云ふわいの、何ぢやるとまゝ、よ押わけて見ましよ、搦分けて見ましよ、
 ぐつと押分けた、押分けて見たれば、鳥のかす、山雀小がら、ひわのひめぎみ、
 をそやくまどりや時鳥、その中でも小まめな鳥はみそさんささい、形がちしよても
 齒ぼしがまめで口めがまめで、何もかも飛んで出て嫁入しる、だんかをば彼方向いてちよくちや、
 此方向いてちよくちや、ちや向いてちよくちや、ちよくちや、こまちやとこんでゐるとこそ
 ひかもんで構いた。

(以下略ス)

四 出演者氏名

本夫	内田琴次郎	内田勘次郎	栗田 碩
才藏	竹内 高清	土木末太郎	土木甚太夫
監督	山下 與平	内田 清吾	

附記 曲目上演順序(但 都合に依り多少の變更もあります)

十四日(晝) 御祝儀萬歳 御家萬歳 (夜) 鳥さし萬歳 櫻づくし萬歳
 十五日(晝) 彌萬歳百人一首 東海道五十三次萬歳 (夜) 御話扇づくし萬歳 木やり萬歳
 十六日(晝) 舞踊萬歳 寶づくし萬歳 (夜) 宇治川先陣萬歳 手踊萬歳

田 植 踊

宮城縣名取郡秋保村

一 名義と沿革

田植踊は古くから奥州各地に行はれ、秋保村の六部落の中、三部落まで之を傳へましたが、現在は今回出演の長袋
 にのみ残り、その起源の年代は不明ですが、太鼓の皮の裏に元祿年間に調製の事が記してあります。舊正月より三月
 二十一日の長袋の鎮守神明社の祭禮まで、他の部落を廻つて踊り、本年の豊作を祈り親交を暖めるのが目的で、近年

中絶しましたが昭和五年に、若い時をどつた老人連が辛うじて復活しました。

二 歌舞の實際

元は役々は世襲で、彌十郎は元服の年に當る少年二名、淺黄の投頭巾、黒地で背に千兩蕉の模様の大平袖、赤い丸ぐけ帯、黒地股引に波に月に兎の縫模様の前ぼろ（廻し）に紺足袋の姿で、踊のつど前口上を云つて踊ります。次に早乙女は数は一定せず可憐な娘達が花笠を冠り、紫地の布で鉢巻やうに結び下げ、振袖を着て踊ります。早乙女は以前の早乙女が後見になるので、歌は音頭取を唄あげ頭と云ひ男一人、續く唄あげは男女數人、囃子は笛に小太鼓に大太鼓です。世話役は宿六を中心若衆頭（若長）が勤め、雜役をオカバヤシ、ミナクチ係、カツタメチラシと分けます。舞台は間口十五間、奥行七間、白を重ねて積上げ、その上に板を敷並べて作り、屋根を葺きます。宿六の家の前や神社境内に建て、夜に入ると篝火を焚きます。さて一行は道中囃子賑かに阪を越え、森を抜けて來て舞台に上り次の順で踊りますが、見物人から褒め詞の長ゼリフが掛ると、舞台からも即興作で應酬し、またオカバヤシは興に乗じて「返して〜」と叫んで、一つの踊を反覆させ、且つ好意的に悪口を云ひます。

三 歌詞

入端 ○お正月はおめでたいぞや お祝ひ申す御亭様 ○お年男は太郎次殿の 繩に松を迎へる

○神代方ではいつも五月は上から菖蒲が流れる

鈴田植 口上一は萬物の始めとかや 二世安樂の世の習 三は三極頂いて 四海の波も穩かに

五つ一把で五升取る 六つ昔は閉さぬ御代とかや 七つ何事もないやうに 八つ彌十郎を先として

九つこゝでの御田植 十で東西南北の果迄も コリヤムツシヤ岡の衆、シーカト〜

○淺い川の一の水口 植ゑたる松は何松 ○若や松の一の枝に 御殿の鷹は巢をかけ

一本扇 口上奏の始皇の御狩の時 俄に誘ふ雨雲の 降來る雨はハラ〜と 帝は雨を凌がんと

小松の下に駕を止め 此松しん〜として 枝を垂れ葉を重ねて 雨滴も洩らさねば

帝は歡感にして 松を太夫と名づけしぞや 大黒天の批把扇 そこで布袋が太鼓打つ

囃子何と打つ 口上テレツク〜天下太平の御代と打つ

○どこやよりも面白いのは 相馬の殿の御在所 ○お城見申せば千本並杉 前は大川そり橋

二本扇 口上一夜明ければ春だとして 四方の景色も賑々しく 彌生の櫻滿々と 一本あやめも咲いてゐる

土用田の草眞盛り 雲の峰をも薄ければ みな一面の稻むしろ

○反橋の見めの良いのは 大工がらか木がらか ○大工柄より木柄よりも 手斧と鉋のかけよがら

三下り二本扇

○さんさ時雨か萱野の雨か 音もせできて濡れかゝる ○日和長閑や愛宕の山に 鶴の巢籠り峯の松

○雪のむら消え大東山にや 立つや麓のかま煙 ○名所大畠山にや 雲井はるかに鶴の聲

霞たなびく大倉山の 峯の白雲花と見る (前口上は略す)

手拍子

口上此處に天照神の後胤にて 長生老と云ふ人は 此松蔭の岩間より

不思議の泉を見つけしぞや 養老水と名づけたり 老いたる人も若くなる

此水田上に掛渡し 代滿々と搔平らげ さあ〜手拍子を植ゑ始められ候や シーカト〜

○鎌倉の銀治の娘は日本一のしやれ者 ○降る雨を油につけて 十五夜お月を鏡に見

錢太鼓 口上げに蓬萊や高砂の 松も枝垂れ葉を重ね 巢をくふ鶴の齡をば 龜の萬劫古川や

流れも清き代掻き水 高み窪みもないやうに 錢太鼓と植ゑ始められ候へや シカートく

○今日の陽は晝には廻るが 晝持の遅しや ○晝持が三人ござるが どれが田主の嫁御だ

○赤い袴に紺の前垂 あれば田主の嫁御だ

はね太鼓 口上昔文王の世を聞けば 鳩鶴は一つ巢に きりん鳳凰も出て遊び 是を閉さぬ御代といふ

云ひ侍へけり百万年 コリヤムツシヤ岡の衆 これもさうく仕度よくんば はね太鼓とつけられ候へや

○名取川の不動の瀧は さても名所なとこかいな ○霧も掛る霞も掛る さても名所なとこかいな

あがりはか 口上ホホツトヨシく 穂は兜の形して 萬壽を祝ふ万々年 幾歳はえある君ケ代の

我々共も此の御代に出て 太平を祭らんと 天下太平の御代とかや

言葉 かけ終り植ゑ終りて候へば そろくあがりはかとせられ候へや

○あがりはかの早乙女達に 誰も懸念かけるな ○玉の御輿で送り申すぞ 來年ござれ田の神

四 出演者氏名

唄 須藤 一馬	佐藤 いせ	佐藤 すみ	唄あげ頭 相澤 浩之
大太鼓 小太鼓 沼田清五郎	柴田林太郎	小太鼓ト岡藤 佐藤 金助	
笛 熊谷 敏	兼若衆頭 伊藤長之助	彌十郎 沼田 良吉	岡野 武
早乙女 伊藤たつ子	沼田カノエ	沼田 春江	大江 幸枝
			伊藤ハルミ

しをどり 附 お蔭踊

大阪府泉北郡上神谷村

一 名義と沿革

こをどりの文字は不明ですが、天智天皇の勅願寺で名高い鉢峯山法道寺の氏神、國神社の舊曆八月廿八日の祭禮に昔より行はれて来たもので、村が大坂府で最も邊鄙な、和泉河内の國境に近い所であつた爲め、今日に残つたのでありませう。それも明治四十一年に國神社が櫻井神社に合祀となつたので、一時中絶しましたが、最近復活の運びとなりました。

二 歌舞の實際

祭禮が近づくと足揃と稱して踊りの稽古が始まり、當日は衣裳を着けて當屋で踊り次に神社に詣るので、赤鬼黒鬼は其の假面を冠り筒袖に股引に足袋と草履で籠を負ひ、籠にはヒメコと稱する紙の花を挿し、産衣で匂むので兒を負

ふ形になります、次に赤天狗黒天狗が、その假面と前者の如き姿で鬼の棒を持ち、以上四人を中踊と申して、別に鬼をカンコ天狗を棒振りとも云ひ、これを取巻く輪は常の着物と足袋と草履で、先づ新發意は赤の投頭巾に唐團扇を持つて一名、太鼓は一文笠に左に縮太鼓、右に撥を持つて八名、鉦打は銅拍子を持つのが少年で三名ほど、扇振は一層小さい少年が扇を持つて、豫習の爲に出ます。別に編笠を冠る音頭取が二名、いづれも愛人より贈られた友染の手甲を着け、踊の最後にヒメコを魔除の爲め參詣人に授けます。さて踊は次に記す如く各種あつて、拍子は神前ではデントツ、四ツ、車、他では二ツ、六ツ、八ツ、十六の各拍子があり、先づ新發意の口上で一々踊が始まります

三 歌 詞

道歌 お寺通ひによう鳴る尺八 拾ふて取上げて吹いて見たれば

よう鳴る四節四つ出た 先づ宵に殿を待つ節 夜明けて仇名の立つ節

曉の離れ節とは 夜明けて仇名の立つ節

十七は川へ下りく 黄金の杓で水を汲む 水汲めば袖ぬれ候 襷をかけ候

十七は尼になり候 急いで衣を墨染 染めたとて心は墨に染まらぬ

鳴くはひよどり 鳴かぬは小池のをしどり

やれ新發意 急げ新發意 あとから時雨がして来る

若衆踊 お若衆様の召したる帷巾 あら美しやどこ屋染めで候 伊勢のしうや染で候

お若衆様の召したる草足袋 あら美しやどこや切で候 伊勢の草屋で切り立て候

四季踊 東は春かと打見えた 雉子の鳥をばほろとを打てば いつも春かと打見えた

南は夏かと打見えた 築山に池をば堀らしつゝ 池の中には とうらいへいじよが

えちちやとて三つの島を築かしつゝ 島より陸路の歸りには 金の反橋架出し

橋の許には東南のかり様うつろ船 浦島太郎は釣の舟 五色の糸でもつながしければ

いつも夏かと打見えた

西は秋かと打見えた 萩の花も咲亂るれば いつも秋かと打見えた

北は冬かと打見えた 炭焼き翁が炭を焼く 炭の籠より煙が立てば いつも冬かと打見えた

船形踊 西に見ゆるは清田の船ぞ あれこそ薩摩のうはが船 舟の上積 意を何と見た

せんぐはん小鳥は囀るや (以下略)

鎌倉踊 鎌倉殿は今日も吉日 日も良いほどに尋ねて見たれば 鎌倉殿の御館 (以下略)

具足踊 兜は何を好まれた 四方島田に吹返し 大對鉞形挿させつゝ (以下略)

鮎引踊 わしの殿御は一條河原で鮎を引く 姫御は都で鮎を賣る (四條河原マデアリ)

館踊 イヨ館へ参りて御門の掛りを見渡せば 門は白金 扉は黄金 さし木に赤銅は先づ見事 (以下略)

御山踊 これから見れば上山のお山 さても珍らしみ山の石楠花 あれこそ若衆の土産にしよ (以下略)

四 あかけ踊

儀式的舞踊が伊勢踊(伊勢音頭モ) お蔭踊で終りになる例は多く、これをとりも其一つで、上神谷村のお蔭踊は慶應年間に各地に天から伊勢神宮の御札が降つたので、エジヤナイカくくくと云ひつゝ、諸國より伊勢參宮の者が殺倒した時の名残であります。「お蔭ありやこそ世界の人は欲を離れて施行する」「草鞋や笠の紐しめて山のあなたのお伊

勢様、編さん紺さん中乗さん、サーサお蔭でナア、コリヤ／＼抜けたとサ」等の歌が今も宴會で歌はれます。

五 出演者氏名

木目 貞次	杉原 明義	小川 政一	西田 實二	西田 隆雄
浅田 和一	中條 元一	中條 政治 (以上 太鼓たたき)		
中條梅太郎	浅田 實 (以上 音頭)			
浅田 義忠 (シンボチ)	森口忠太郎	杉原包太郎 (以上 鬼)		
鈴木喜三次	阪口五一郎 (以上 天狗)	吉川 郁	西田清太郎 (以上 鉦)	
田中 爲次	北野 定一 (以上 扇)	奥野 郁 (監督)		

附記 こなどりの方は時間の都合で、毎回曲目を變へます。

知 多 萬 歳

愛知縣知多郡八幡町

一 名義と沿革

知多萬歳は古への知多郡寺本村が、龜山院の御宇、無住國師の木賀崎長母寺の領地であつて、國師が佛法の事を萬歳に作られたものを傳へたのが始まりと云はれます。徳川時代には三河院内の萬歳と共に土御門殿支配下に屬し、將軍家の保護を受けましたが、廢藩以來その事絶え、知多一帯の萬歳も衰へましたに拘らず、八幡町寺本のそれは今も

盛んで、新舊の正月二月の百ヶ日の間、農閑期の副業として約一千人の者が三々伍々、遠く關東まで門付に出ます。但し今回の出演者は舊來の少數の得意先を廻るだけで、一般の門付はしないさうですが、八幡町の青年は萬歳の出來ぬ者はなく、正月以外にも喜び事があれば常にも舞ひます。

二 御殿萬歳と三曲萬歳

舊來の五萬歳は、御殿舞、地割、神力、六條、法華經で、後の二つは衰へ、全体を通稱して御殿萬歳と呼びます。太夫は立烏帽子に白地の素袍で扇を持ち、才藏は侍烏帽子に狩衣の袖を絞り小鼓を持ち、才藏の數の多いのが特色であります。次に天保十年頃、鼓に三味線と胡弓とを入れ、物珍らしくて評判になりましたが、明治二十七年頃、村の素人芝居にチヨボの代りに用ゐ、非常な人氣を得、その後明治四十年頃より一層盛大となつて今日に至りました。これはチヨボ代用にもなり、同時に囃子方みづから身振して、萬歳代用ともなるもので、忠臣藏、曾我、矢口渡等の曲目があります。

三 歌詞 (三曲の方は常の義太夫に依る事多きに就き省略)

御殿萬歳 地割

陰陽東は建武山 西は瑤落 南は泉水の花開く 北には如意寶珠の玉 八疊の間には黄金の砂を敷つめて
千代も榮えて萬年の御祝ひ申す 水も若やく木の芽もさいて 榮ゆるとびがしきりにくる
雉子なる刀を腰にとさし 讓葉を口にと含み 五葉なる松を手につけて 寶の君なる源氏が御門を押開く
おしやは和御寮で候はずんば 乾の隅より黄金の砂を敷並べ 左巻にもきり／＼と 右に巻てもきり／＼と
一夜々々面々に 万本ばかりの柱を 御内陣なる柱の數が 四十八本に極まりて 集め／＼て十三本の

柱の数を讀上ぐる 御取込んで合すれば 一本の柱が眞澄高尾の大明神 二本の柱が二宮神社
 三本の柱が櫛の神社 四本の柱が辨財天よ 五本の柱が津島の神社 厄神除なる御尊 六本の柱が正八幡と
 七本の柱が七尾の天神 八本の柱が八劍宮と 九本の柱が熊野の權現 十本の柱が十羅刹 十一本の柱が
 正道八劍熱田の神社 十二本の柱が四國の國は琴平神社 十三本の柱が三十
 さて又六道人が天下らせ給ひける 瑪瑙の石も此の御上 エンヤラヤと云ふて立てられける (中略)
 元日の事なれば そこの嬢さん方の 手鞠の拍子がスト、コトン オヤ／＼と囃せ申せよこれよ
 一や二や三や四五六七つ 七つ何事ないやうに 西宮の御大將 誰ぢやどなたぢや
 恵比壽三郎ぢやないか 其又お次が誰なれば お色の黒い背の小さい 誰ぢやどなたぢや
 大黒様ではないか 其又お次が誰なれば 鼻水垂らした身汚ない 海老腰姿のじろさんが
 誰ぢやどなたぢや 壽老人ではないか 其又お次が誰なれば 頭の長い オホ、誰ぢやどなたぢや
 福祿壽ではないか 其又お次が誰なれば お腹の大きなホテ／＼ 誰ぢやどなたぢや
 布袋様ではないか 其又お次が誰なれば お色の白い目ばちやか 誰ぢやどなたぢや
 辨財天ではないか そこで毘沙門格氣して 七福神の其中で 辨財一人を誰が賞めた／＼と
 一杯機嫌で申す 喜ぶ御代の事なれば 祝ひ始める舞まふて エハ、アハ、
 笑ふ門には福來る 遠江には富の倉 南風には波々と 千秋萬歳樂まで。

四 出演者氏名

北川 正夫 山口春太郎 早川助太郎 平松庄次郎 浅井 博次

阿知波嘉平次 北川 貞三 北川幸太郎 (長福太夫事) 村瀬 正吉 (監督)
 附記 曲目多數に就き、毎回とりかへます。

人形淨瑠璃

徳島縣 徳島市 勝浦郡勝占村

一 名義と沿革

淡路に發達した人形淨瑠璃は同藩蜂須賀領の因縁から、海を越えて阿波に入り、阿波淨るりと稱する特殊の語り口
 が出来るほど阿波一國に普及せられました。蜂須賀小六の子家政は寛永十五年に八十一歳で歿しましたが、徳川氏に
 取つては外様大名である爲め、加藤福島の轍を顧みて徳島に城も築かず、ひたすら江戸幕府に對して他意なき態度を
 取りましたが、一方に於て巧みに間諜を放ち、常に情勢を探つてゐたので、諸國を興行する人形遣ひを以て、これに
 充てました。その報酬として人形遣ひを優遇し、興行地の三里四方に於ける他の興行物を禁止し、また勸進興行を屢
 々許可しました。この際は各町村が義務的に入場料を割あてられます。そして阿波に於ては歌舞伎を禁じましたので
 芝居と云へば人形である爲め、老若男女が常日ごろも口にして、子守唄さへ阿波では義太夫を語ると云はれるほどに
 なりました。

二 素人の人形と淨るり

それで淨るりも次第に阿波の言葉使ひの影響を受け、阿波淨るりと呼ぶほどの特殊の語り口となり、殊に女義太夫

の發達も、それに與つて力があつたのですが、最近では古い阿波淨るりは次第に衰へ、大阪式に變りつゝあります。人形は淡路系統で、大阪の文樂座とは違ひます。現在の阿波には、専門の人形淨るりの興行の他に、各町村に素人の團体が十五座ほどあり、今回出演の勝占村大字大谷の阿波源之重の座は農業の餘暇、祭禮や何かの催にやるので、太夫と三味線は徳島市の素人が作つた義弦會といふ團體で、此の種の團體は非常に多いのであります。そして淡路阿波の狂言は、時代物の通しをやり、これが文樂座にも残らず、一般にも知られてないのが少なくないと云ふ特徴があり奥州秀衡有鬘入聲、織田館二子日記、源平八島合戦、賤ヶ嶽七本槍、等々が聞え、人形の大きさは立役が鯨尺で五尺女形は三尺、人形遣ひの穿く下駄が立役は一尺、女形は七寸と云ふほどで、文樂座よりは諸事大まかであります。それで世話物のこまかい表情より、時代物の豪放な荒々しい振舞に適した爲め、世話物は大阪の人形を見よ、時代物は淡路(阿波も同じ)を見よと云はれます。

三 上演曲目

今回は三日間晝夜六回を約四十分内外づゝ御紹介の豫定で、時間の制限上、丸一段づゝを演ぜられぬのは遺憾であります。右の中、奥州秀衡有鬘婿(原名、元文四年並木宗輔作)の筋は、藤原秀衡が金賣吉次に扮して都に上り、鞍馬山の牛若丸の供をして東に下り、遠江池田の宿で、熊野と槿の姉妹が以前、平宗盛から奪つた源氏の白旗と蟬折の名笛とを貰ひ、奥州の秀衡館に着きます。今回御紹介の場面は、此の三段目秀衡館で、秀衡は牛若丸の臣下たらしむべく三人の實子と一人の庶子の膽力を試します。然るに實子は怯懦で、此の爲め北の方は耻ぢて自刃し、庶子泉三郎は豪膽、牛若丸より盃を頂きます、さて北國一圓は秀衡の味方についてをりますが、出羽の佐藤庄司は二子繼信忠信を誇り、従ふ模様が見えないので、庄司の娘で、泉三郎の母に當る信夫は、一命を捨て、父を説服する使者とならうと出

發する所で終ります。此の續きは信夫の成功と、浮島ヶ原に於ける頼朝義經の對面、富士川の合戦に移ります。

四 出演者氏名

- | | | | | | | | |
|----|-------|----|----|------|-----|-----|-------|
| 人形 | 上地國太郎 | 井内 | 幸藏 | 井關 | 勇藏 | 林 | 佐太郎 |
| | 勝浦 | 高藏 | 杉本 | 小市 | 武市 | 友太郎 | 幸夫 |
| | 上田 | 儀夫 | 遠山 | 一五三藏 | 榎本 | 儀三郎 | 小川 |
| | 淨るり | 江西 | 積 | (鳴門) | 宮城 | 國太郎 | (秀衡) |
| | 三味線 | 伊勢 | 與市 | 小林 | 賀次郎 | | (御所櫻) |
| | | | | | | | 賤ヶ嶽 |

附記 上演豫定は、御所櫻三段目を十四日晝、賤ヶ嶽三段目を十五日夜、奥州秀衡三段目を十四日夜と十六日晝、阿波鳴門八ツ目を十五日晝と十六日夜、そして式三番は毎夜添えるつもりですが、都合に依り順序は變更するかも知れません。

雨 乞 踊

滋賀縣阪田郡大原村

一 名義と沿革

伊吹山麓の大原村は、一千三百年前の白雉年間の開墾で、氏神岡神社が其時に建てられました。夏の早には大原の庄十二ヶ村が神社境内に於て、早朝より夕暮まで順次に雨乞祈願の踊を行ひますが、残存の古文書は延寶年間よりあつて、効驗の無き事はなく、過ぐる昭和四年七月十三日の雨乞踊も大雷雨を呼びました。かくて初秋の五穀豐熟の折

を得て、雨乞御禮踊をいたすのが古例で、祈願と御禮の二通りの踊りかたがあります。

二 歌舞の實際

参加者は男子のみで、太鼓と鉦の踊子は袷折笠、緋の射小手、縞の輕襪、背に金銀の幣を負ひ、足袋に草履、音頭と笛は同じ笠、紋服の羽織袴、足袋に草履、他に子供の瓢振り、側音頭の一團が、おこない囃子で境内に入り、道行囃子で輪を作り、場ならし曲で打切り、道行の歌になります。次に多良福の曲、鳥飛の曲あつて、御禮本歌になり、道行を打切つて御禮踊節に移り、上中下の三節を打つて綾の踊に變り、綾の本歌を歌ひます。次に穗交しの曲、瓢振りが過ぎると疊二枚を敷いて綾の歌、綾の節上中下の三節、新車の囃子で輪になり、終りの歌、信樂の囃子で結びになります。以上は御禮踊です。

三 歌 詞 雨乞御禮踊

道行 我里は大原の庄の西の果て 自然と秋に當る村 豊の稻穂のゆゑしきに

我を忘るゝ嬉しさの 餘りに御禮を思ひそめ 我家を出る明け七つ 道草々の露ともに

それ〴〵誘ふ連れ子供 次第々に寄りくれば 心嬉しき勢揃ひ いざ詣らんと勇み立ち

心急げば早や着きて 神のみまへに蹲り 御禮の爲めに手を仕へ

御禮本歌 げにや早の物憂さに 見捨て給はぬ恵みにて 雨の數々ありがたや 御禮踊を踊ろよ〴〵

打眺むれば快き 神の御靈の色見えて 稻穂ゆゑしき豊の秋 御禮踊を踊ろよ〴〵

桔梗かるかや花すゝき 吾木 香萱 女郎花 御禮の踊をさしもぐさ

綾の本歌 願ひの雨は糸筋の 結ぶ思ひを振分て 綾や錦を織りそめて 綾の踊を踊ろよ〴〵

千草の花を織上げて 野に松蟲は金銀の いと面白き囃し聲 綾の踊を踊ろよ〴〵

いざ蟋蟀切りたてゝ 仕立て上る御神の 戸帳になるぞ有難や

綾の歌 綾の模様は染色わけて 機織虫の箠音勇め 神の御心鈴虫よ

馬追虫の荷の數々や 露もこぼるゝ聲はりあげて 錦の機の捧物

長し短し言葉の綾は 尺取虫の尺にも合はず アラ恐れあり神の前

末は遙々長けれき 御禮踊はこれまで〴〵

雨乞祈願踊

道行 續く早の物憂さに 我家を出るこま〴〵の 野原にあまる歎きかな

市場の里へ来て見れば さしも伊吹のさしもぐさ 燃ゆる思ひを打重ね

空の曇りは中村の こがれ寄る身の涙こそ 千草の露となりぬらめ

打眺むればむらだちて 木々も梢もしほれつゝ 言の葉もなき早かな

早や木のもとに寄添ひて 里の長路も立石も 神の御前に着きにけり

雨乞本歌 村々揃ふ叢雲の 暗き思ひを見そなはし 恵みの雨を垂れ給へ 雨乞踊を踊ろよ

雲井遙かの雨神に かゝる願ひを振分て 憐み給へ天が下 雨乞踊を踊ろよ

憂きなか〴〵の繰言も 唯一筋の御手洗に 清め給へ穴賢 末は遙々長けれき 雨乞踊は是れまで

四 出演者氏名

音頭	戸田捨之進	森	孝太郎	堀	常太郎
笛	松居清太郎	泉	茂	坪井	津一
鉦	庄 徳平	堀	貞一	役本	大橋彦之進
太鼓	大橋 英一	森	兵内	戸田	藤太郎
庄	奥治	中島	與左衛門	大橋	次男
浅井	秀雄	馬淵	孫一	戸田	捨太郎
監督	松田仲之進	大橋	卷一	總取締	岡神社司多倉源太郎
		矢野	政太郎	庄	由三
		森	一雄	大橋	博雄
		大橋	彦六		

附記 時間の都合上、省略の事があるかも知れません。

草地村盆踊

大分縣西國東郡草地村

——馬子唄、白磨節——

一 馬子唄

大分縣の東、瀬戸内海に突出した國東半島は、東西二郡に分れ、草地村は西の方の中央に位して、農業と養蠶の村で、國は豊後に屬してをります。こゝらの馬子唄は、奥深い山々から、木材を馬に負はせ、馬子が手綱を取つて道々歩きつゝ唄ふ唄で、歌詞は

野でも山でもヨー 子を持ちなされ 千の倉よりや 子が寶ヨー

山は焼けてもヨー 山鳥や立たぬ 何の立たりよか 子を捨てゝヨー

二 白磨り節

祭禮などで殊に多量の手打うどんを造る時、近隣の婦女は交替で二斗三斗の小麥を毎晩の如く夜中迄も磨ります。長いヤレ木に五六人が取継り、石臼の穴元に一人取附いて、小麥を入れながら白磨り節を唄つて粉をひきます。多く一人が始めを唄ひ、他の者が次ぎを續け、かくてゆるやかな唄と共に眞白い粉が絶間なく、石臼からこぼれて出ます。次は尻取文句の歌詞です。

生まりや山國育ちは中津 命捨て場が博多町 博多町をば廣いとおしやる

帯の中ほど無い町を 帯にや短かし褌にや長し お伊勢編笠の緒にやよかる

お伊勢編笠をこきやけて冠りや 少しお顔が見とごさる 見ても見飽ぬ鏡と親は(以下略)

三 盆をどり

草地村の盆をどりは、盆のみならず、祭禮、宴會、寄合で興に乗れば、老若男女相和して直ちに踊るもので、舊七月の盆には、新佛の家を歴訪しても供養に踊り、また神社の境内や學校の庭に、三段の櫓を立て、下では太鼓を打ち中では笛を吹き三味線を弾き、上では音頭取が番傘をさしながら音頭を取り、その櫓の廻りを無数の大群衆が踊つて廻ります。踊子は或は思ひくの浴衣もあり、一團揃ひの派手姿もあり、男子女装、女子男装、それらの假装に思ひを凝らすもありますが、六調子の急な踊は女も法被姿になります。音頭が變れば踊も變り、大別して十餘種ありますが、今回は、レソ、杵築、マツカセ、ヤンソレサ、六調子その他。いづれも二上りの物を御紹介しますが、次

第々々に急調に變るのが特色で、いづれも八代將軍の勤儉獎勵の布告當時より、農村の娛樂として行はれて今日に至つたので、國東郡一帯は共通してゐますが、六七十年前に草地区に某と云ふ天才が現はれて以來、こゝの盆踊は聲價を加へて、昨夏の宇佐八幡宮大祭の郷土舞踊大會に、一等賞の選に入つたものださうであります。

四 盆をどり歌調

レン(伊勢屋くどき) 團扇を持つ

音頭 アーリヤ皆さんレンなどやろやコラサノサ 踊子 ハドツコイ

音頭 そちやノレンなきやろな 踊子 それへやノヤとヤアそれサ

音頭 國は豊後の臼杵の町でコラサノサ 踊子 ハドツコイ 音頭 角の伊勢屋といふ町人は

膽が太うて大事を好む 一にや豊後の鑛山堀ると 四百餘人の人夫を寄せて 堀りも堀つたか三年三月

金は出らずに唯だ土計り 二番目に又日向に廻り 日向殿様にお金を借りて 殿の御林樟山で

西や東の木樵を集め 檜千石樟千石で それを都に積出さんと 思ふ折から山沙出で

伐つた材木皆悉く 行方知れずに押流さるゝ 三度目に又火災に逢ふて 家も系圖も皆焼失せて

残るものちゆちや石の口ばかり 流石伊勢屋も哀れな次第 裏屋背戸家の借家の住居

朝の煙も程立て兼ねる 伊勢屋子供が姉妹ござる 姉のお初は十六歳で 妹お菊は十三歳よ (以下略)

ヤンソレサ(吉田屋くどき)

音頭今の音頭さんなかノ上手 踊子オトセコラセ 音頭一寸休んでお茶なと上れ

踊子ハ、ヤンソレノサ(中略)肥後の熊本吉田様は 親の代から二辨使ふ

人にやるのが八合半よ 我身取るのが一升と二合 あひで四分の我慾をなさる

ちぎや秤の其目を盗む それが我子のお初に報ひ 兩の額に角生えまする (以下略)

六調子(政五郎くどき)

安部の川村名は政右衛門 それの世取の政五郎さんは 年は十七角前髪で 角の前髪中すき分けて 大小差いたる袴の着腰 廣いお江戸の繪の名人も

政五姿の似せがき出来め 寺の和尚さんを御師匠にとりて 日にち毎日學問なさる

村の御庄屋の名は幸右衛門 一人娘にやお条とござる 年は二八で花なら蕾

器量よいこと卵に目鼻 立てば芍薬坐れば牡丹 歩む姿は姫百合の花

お条二階で三味線稽古 下を政五がそろりと通る 一目見る目がしんとろノと

二目見る目が戀路となりて 文をやりたい心が起る 硯引寄せ墨磨り流し

鹿の細書墨ふくませて 思ふ戀路をさらノ書いた。(以下略)

五 出演者氏名

音頭	伊藤 由造	太鼓	近藤 雅孝	笛	前田佐太郎	三味線	上原ミヨ子
踊子	近藤 誠	清藤	國男	安部	義人	安部己之司	近藤 賢
	安部 績	安部	藤夫	安部	縁	川上 正士	近藤 正彦
	近藤千代子	高橋	房子	安部	三代子	近藤サ、エ	近藤フサエ
	近藤 澄子	近藤	鈴子	近藤	睦子	伊藤	公子
監督	近藤 貞吉	安藤	轍司				

後記

大正十四年本館の落成記念に始めて試みた全國郷土舞踊と民謡の會が絶讃に近い程の好評を博したので、爾後毎年一回づつ恒例として開催し昭和三年は諒闇で御遠慮申上げ又昨年は内外時局多端の爲中止するの已むなきに至つたが今年その第七回目を開く事の出来たのは、吾々の欣びとする所である。創始以來現在までの出演實に四十一府縣四十八種目に達し、群馬、茨城、福岡、熊本、鹿児島、北海道、台湾、朝鮮を獲すのみとなつた。今後は等が悉く出れば一應全國を網羅した事になり、全國郷土舞踊と民謡の名に恥ぢない譯である。併し日本全土に存在するものから言つたら是までに上演したものは僅かに其一部分で、未だ藝術的香氣の高い歌や踊は隨所に在るので此仕事の完成は猶遠き將來に屬する。兎に角この會が年毎に世人の關心を呼び期待を大きくし、今では眞に無くてはならぬ存在となつたのは事實で現に昨年中止した處、多數の人々から失望や物足りなさを感じて來た。今後共事情の許す限りは一層盛大に之を續けて行き度いと思ふので、此上とも各方面の御援助を希ふ次第である。

第一回以來絶えず御指導を仰いでゐる柳田國男氏、高野辰之氏、小寺職吉氏に今回も亦多大の御援助を煩はした事を茲に深く感謝いたします。

昭和八年四月

日本青年館

昭和八年四月五日印刷
昭和八年四月十一日發行

定價金參拾錢

編輯 兼 神田海之助
東京市四谷區霞丘日本青年館内

印刷 人 田口肇
東京市芝區三田四國町二五

印刷 所 伊藤印刷所
東京市芝區三田四國町二五

發行 所 財團 日本青年館
東京市四谷區霞丘明治神宮外苑

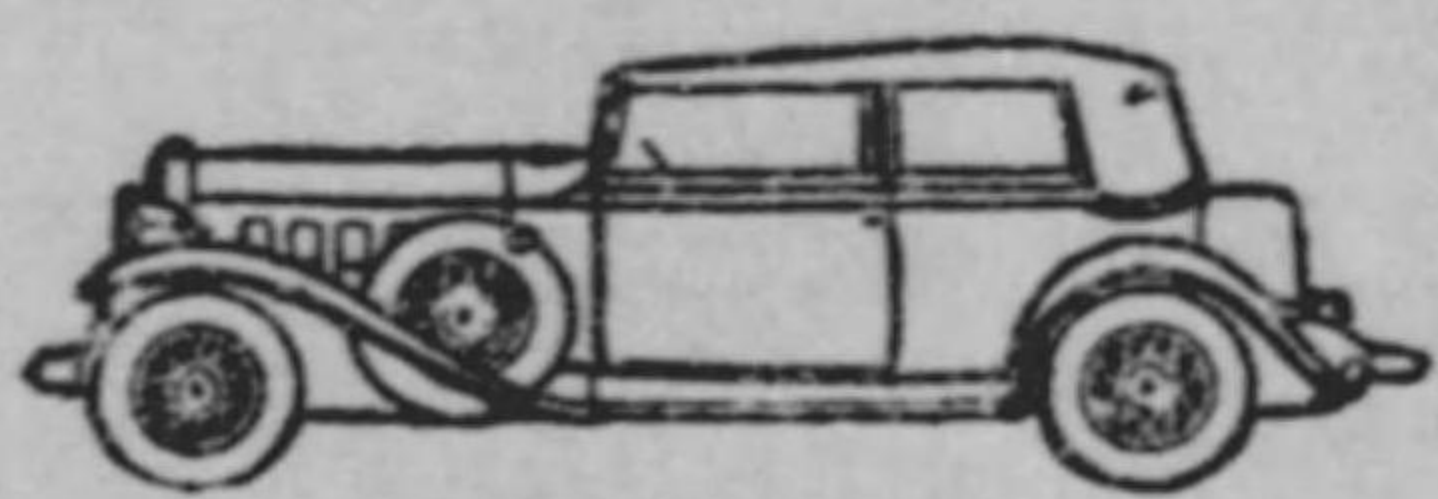
電話青山 四三六〇、四三六一、四三六二、四三六三

當古口タクシーは最新式自動車のみを取揃へて居ります皆様御上京になりまして日本青年館に御泊りの節は是非御利用の程御願ひ致します

市内は一台壹圓で参ります

尙團體市内見學其他時間乗の場合には特に御相段に應じます

御用命の節は日本青年館宿泊部受付へ御申出願ひます



日本青年館
御用

乗心地の善い
古口タクシー
を御利用下さい

東京市赤坂區青山南町二ノ八
店主 古口 平

電話青山一三五四番

御菓子

東京市淺草橋



龜

屋

用御館年青本日

省線驛前
電淺三五六五番
振替東京四七九二四番

建國團子總本店
原名つき入れ團子

菓子と喫茶



東京青山四丁目

日本青年館御用 青柳本店

電話 青山 二三四五六番

青山明治神宮電停前

青柳喫茶洋菓子部

電話 青山 八三一一番

九段遊就館内

青柳喫茶食堂

電話 九段 一四四五番

御注意

最近東京には皆様を不案内な田舎者扱いし甘言を以て案内者も附かない不良自動車に乗せ不正な利益を得ようとする者が出没致しますから遊覧に就ての事柄は直接当社へ御問合せ下さい

▼展望式高級車(定員十六人乗—三十人乗)▼主なる名所は残らず見物▼一巡して元の發着場所に歸る▼沿道見るもの多し(徐行)五人乗はニセモノです

当社新製車は婦人案内付大型(十六人乗—三十人乗)

東京ユ一ラン

乗合



婦人案内乗入

大人二十人以上の團體には割引の規定があります

▼全遊覽時間	八時—十時	九時—十時	九時—十時	八時—九時	八時—九時
▼乗車料金	三圓	三圓	三圓	三圓	三圓
▼下車見物箇所	十ヶ所	三十ヶ所	四十ヶ所	五十ヶ所	六十ヶ所

本社

資本金九百六十七萬圓

東京市下谷區北稻荷町一〇(上野驛ヨリ東二丁)
東京乗合自動車株式會社遊覽部
電話 下谷 八一四一號、八一四二號、二七〇七號

▼案内人運轉手の外に婦人案内人が同乗し歴史的にも興味ある説明をなし又萬事の御世話を親切に致します
▼往切には行先、時間、御隨意のものもあり料金其他御問合せ下さい

◎御一報次第詳しい案内書を進呈致します!

山オルガン特賣

お子様のために
お買求めの絶好期

品景
圓萬壹

期限
六月卅日迄



切定書 進呈

電話 座銀京東 社會器樂本日

術技の高最
間期な確正

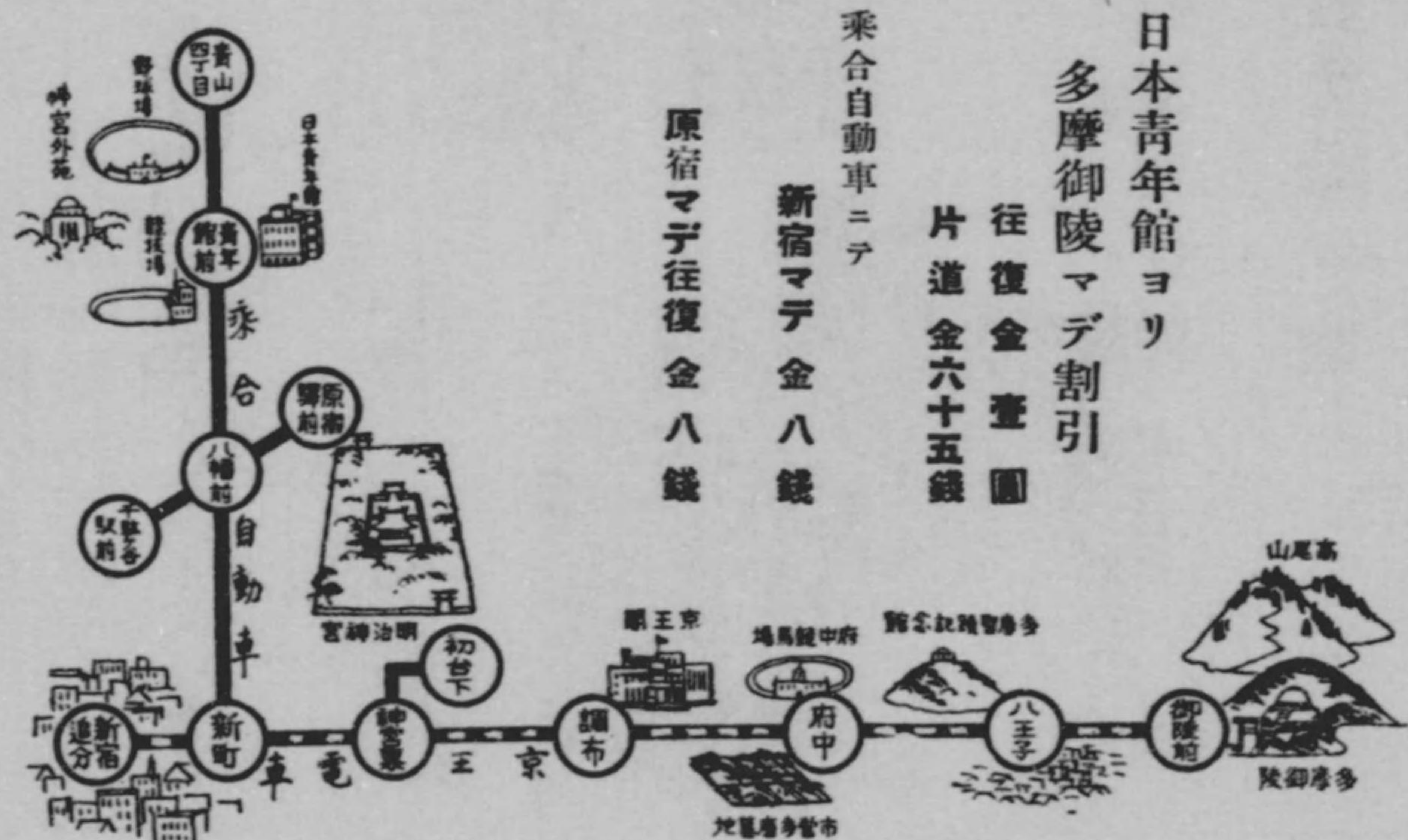
用御館年青本日
館眞寫山青

際停電目丁五山青區坂赤市京東
五〇六四山青話電

日本青年館地下室に
撮影場あり

多摩御陵参拜 東京甲州街道乗合自動車連切符

日本青年館事務所ニテ取次



新築落成

寶亭本店

麹町區平河町三ノ六
電話九段 三三八九
三九二〇

東京偕行社寶亭

電話九段七八九

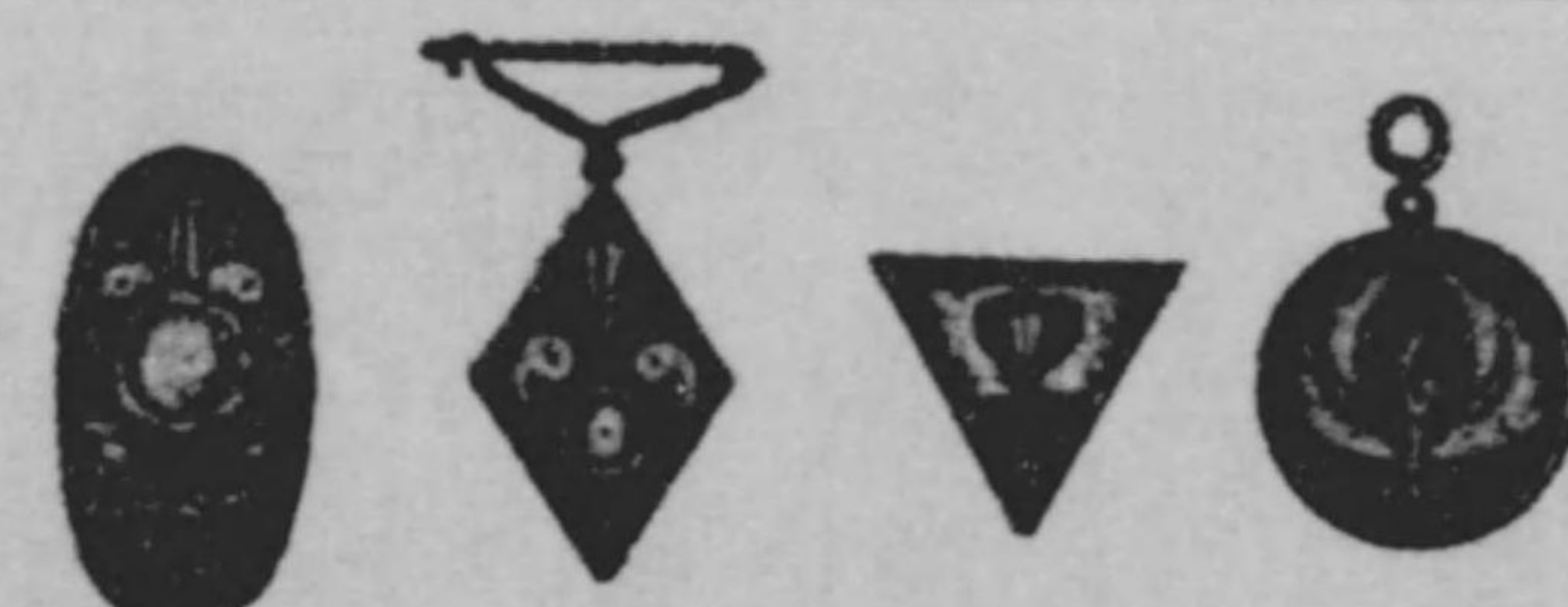
日本青年館寶亭

電話青山三、一九五

新宿割烹寶亭

電話四谷 二、一三六
五、九九九
六、六八二

弊商會の



大日本聯合青年團徽章製造元
日本青年館徽章製造元
修養團徽章製造元
建國祭徽章製造元
少年團日本聯盟徽章製造元

御官廳 諸官廳 青年團 各學校 各新開社 用
東京市九段下 會商章徽
秋葉達人 會商章徽

電話九段三二七九・二六一五 工場町區飯田町二丁目六四

階上洋食部
ビスタ
ル・ドン



青山四丁目電停前
種長洋食部
電話青山 一三二六

淺草觀音様の御歸りには
駒形町電停前

本店 野村理髮館へ

外苑御散策の御歸りには
日本青年館地階
支店 野村理髮部へ

●養老保險

●利益配當養老保險

福德生命

本社

大阪市北區堂島濱通

東京支店

京橋區京橋
電話 六三三七五
六三三七六
六三三七七

●特種養老保險

●勤儉生命保險

石炭 瓦斯コークス商

東京市芝區濱松町四丁目三ノ五

日本青年館御用 株式會社 杉浦商會

電話 芝 七六七七番
一一三三七番
一三七七四番

品川出張所

東京市品川區北品川二ノ一八

電話 高輪 一、〇二七

飯田町出張所

東京市麴町區飯田河岸十三號地

電話 九段 三、三三二
三、三三三

世界一……佛蘭西エラールピアノ

メーソンハームリン
シユウエヒテン
シードマイヤー
ホルーゲル
ヤママト
ピアノ發賣元



三菱輸入ピアノ一手販賣

小野樂器店

銀座五丁目三番地
電話 銀座 (57) 一五〇二番

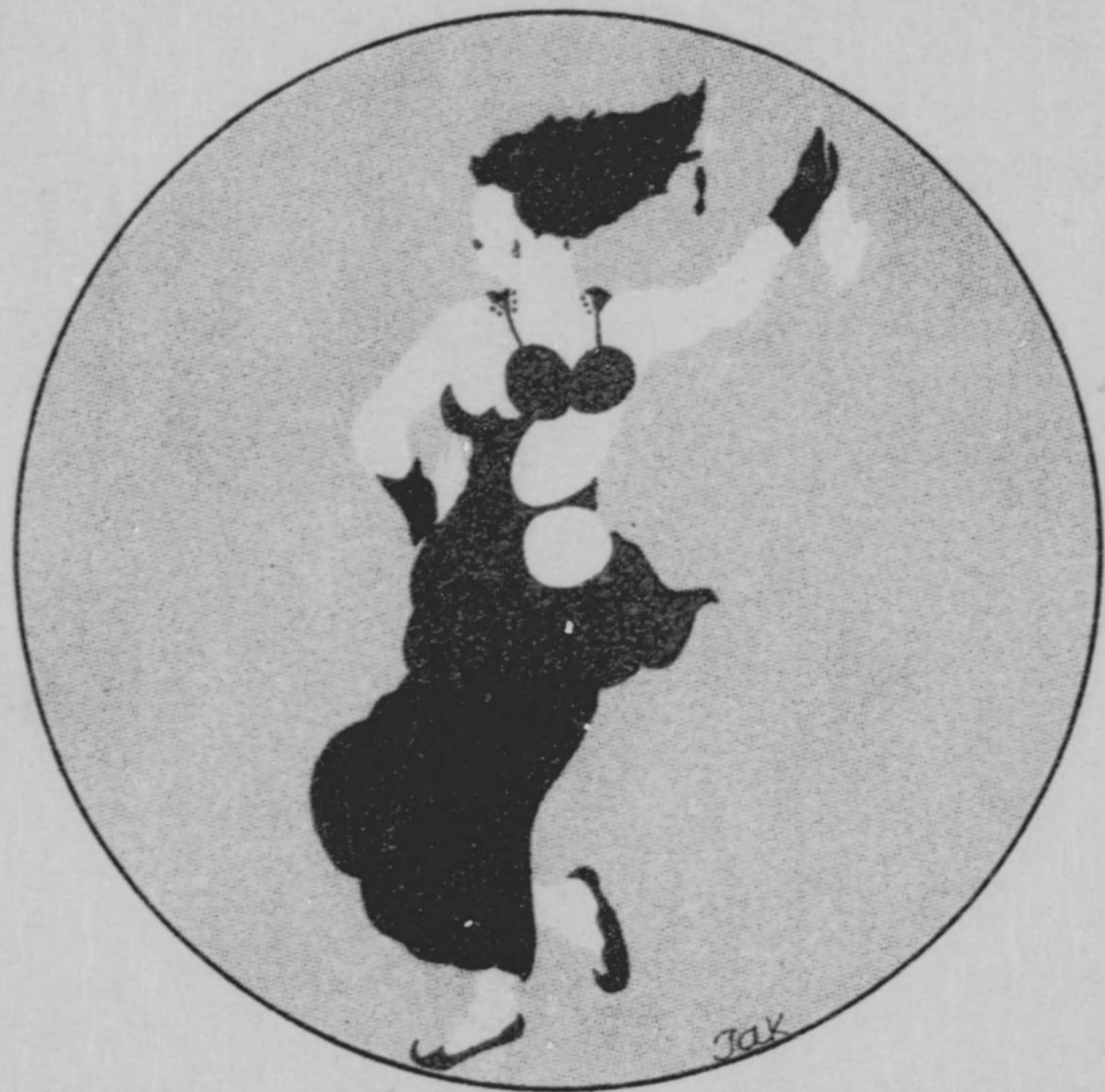
國產映寫機
斷然舶來品に優越せる
純國產の標準映寫機！
商工省選定、本邦唯一の代表優良機！



御申込は速刻!!! 外に月賦販賣の方法あり!!!

マツダ式東洋發聲機研究所

製作工場 東京市小石川區關口水道町四六番地
電話 牛込 (34) 六三六四番
代表者 松田 敦



メタル トロフキ カツブ

佐藤製作所

東京市本郷区根津八重垣町65. TEL. 下谷3262.

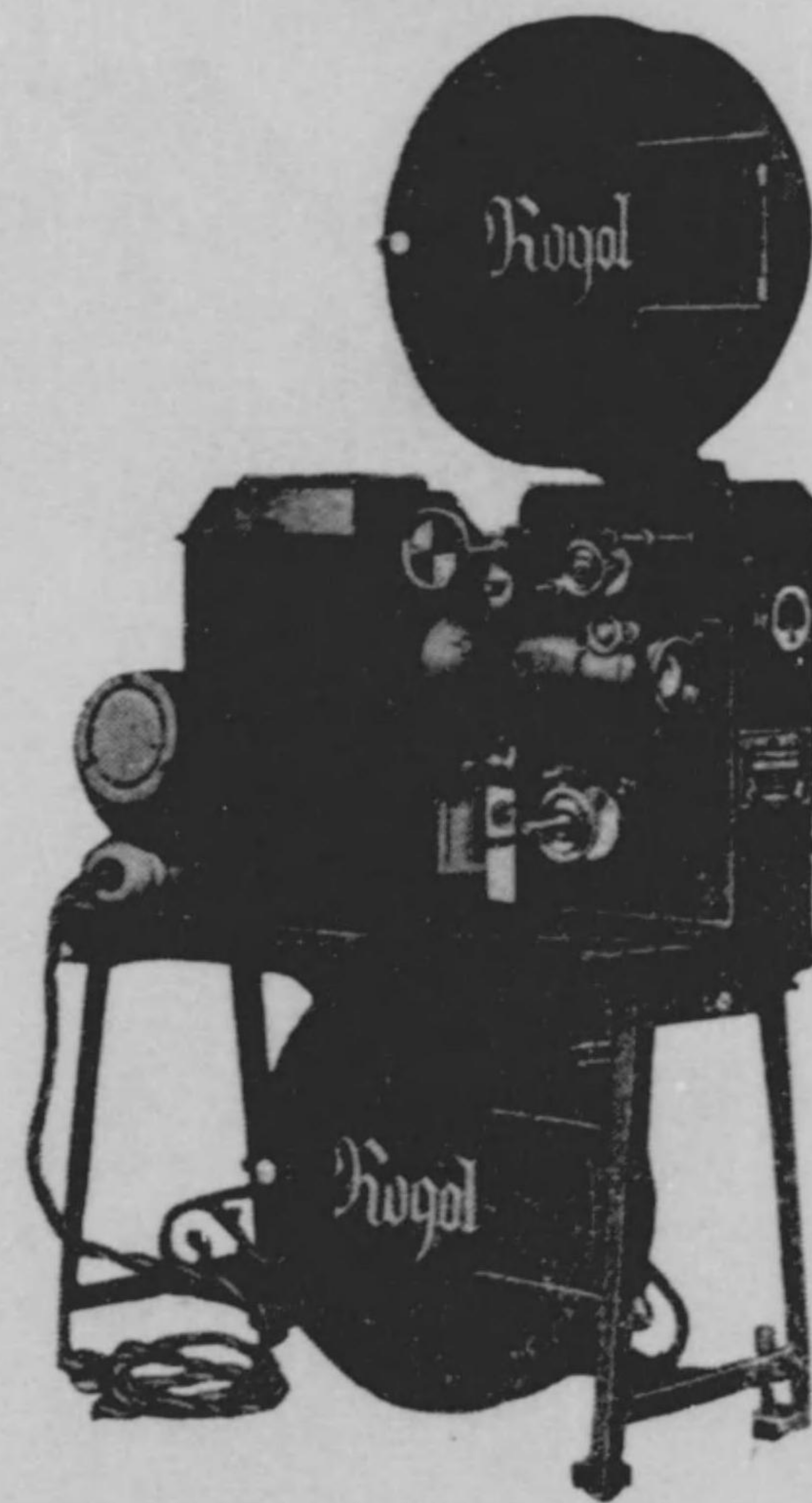
るす倒壓を品入輸々堂

機寫映ルヤー口の密高

威權の産國

斷然舶來品に優越せる
純國産の標準映寫機！
商工省選定、本邦唯一の代表優良機！

命用御之省官諸賜



型Gルヤー口用帶携

【呈進グロタカ付書明説扱取】

色 特

- △絶對安全……防火装置は完備せり
- △光力强大……畫面の鮮明比類なし
- △電球共用……五百乃至千ワット共用
- △操作簡易……取扱ひ操作は全く簡便
- △機械堅牢……耐久力は内外無比
- △能力絶大……完全なる二十間の映寫
- △携行容易……鞆二個に納め却つて輕便
- △價格至廉……外國製品の半價

一九四三日丁一鴨巢西區島豐市京東

場工密高 名社合會

番二四〇一 } 塚大話電
番三三二一四

